ジェンダーを囲い込む、ジェンダーを解放する、ジェンダーの奥を見る

内山田 康 （うちやまだ・やすし）

ジェンダーをコントロールする灰色の男たち

去年の春、僕は上司から呼び出された。僕は政府系のシンクタンクに勤めていて、上司は灰色のスーツを着たキャリア公務員。長く留まる人ではない。三年間続けたジェンダー研究会の報告書の件で呼び出されたのだった。ジェンダー研究会では、フェミニストたちによるもの読んだり、自分たちで調査に出かけたりした。彼はいらいらしていた。報告書の中に収められた論文がひどすぎて、恥ずかしくて出せないと言う。僕はある有名なジェンダー研究者に原稿を読んでもらい、印刷してはならにほど恥ずかしいものかについてのコメントしてもらった。そのコメントによって報告書は日の目を見るが、その上司に再び呼び出されて、今度は辞めてくれと言われた。

僕が書いたのは、次のようなことだった。世界銀行によるジェンダーのメインストリーム化は、女性による経済活動の生産性を上げることと殆ど同義に使われている。権力関係としてのジェンダー関係が持つ問題に関わらず、既存の開発制度の中にジェンダーをメインストリーム化することは、ジェンダー・エコノミー（節約）と言えるだろう。また別の執筆者は、強者による弱者のエンパワーメントが、弱者管理に陥る危険性を指摘した。これらの指摘は、格別新しいことではない。しかし、御用学者であるはずの僕が、このようなことを言ってはならないのだ。僕は場違いにも、クリティカルなジェンダー研究に踏み込んでしまったから、罰を受けることになったのだった。大学とは違って、学問の自由が無い政府系シンクタンクでは、ジェンダーが政治的パフォーマンスにすぐに利用できるかどうか以外に関心は持たれていなかった。ジェンダーの政治性を問題とする視点と、ジェンダーを固定化して開発の手段として利用しようとする功利主義が音を立てて衝突した。クリティカルな視点からジェンダー研究をすることが、ある場所では「恥ずかしい」ことと受け止められ、懲罰の対象になる。私は、似たような出来事を思い出した。

数年前、政府の援助で南アフリカからいわゆる「村落開発」に係わる仕事をしていた役人やソーシャルワーカーたちが日本に研修に来ていた。その人たちにジェンダートレーニングをしたいので一日でジェンダーの集中講義をして欲しいという要請を受けた。そのころは日本には自前の「ジェンダースペシャリスト」が足りなかった上に、僕がジェンダー研究会をやっていたから、そのような仕事を頼まれたのだと思う。南アフリカから来ていた彼・女たちにいろいろ聞いて分かったのは、ANC では以前から西欧的なジェンダーについての意識が高く、村落開発に携わる彼・女たちにジェンダーの講義を日本でわざわざすることは、主催者にとっては意

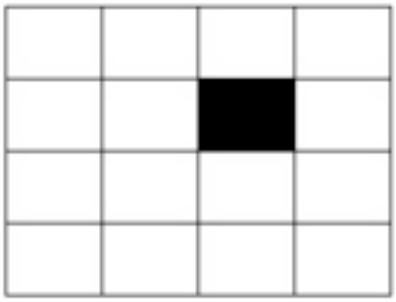
味があるだろうが、少なくとも彼・女たちにとってはあまり意味が無いと思われた。そこにはアフリカの人たちを教育したいという主催者側の欲望が感じられた。奇妙な光景だった。僕は黒板を背にして立ち、南アフリカから来た知識も経験もある人びとの前で、イギリスの大学でよく使われる論文をいくつか引用しながら「ジェンダーと開発」のを話していた。ジェンダーについての常識的な議論（例えばキャロライン・モーザー）を紹介した後、その盲点について話し始めた（使ったのは Kabeer, Nila 1994. *Reversed Realities*）。しかし彼・女たちのバックグラウンドを考えて、あまりラディカルなものは使わない。反応は良い。西欧のジェンダー議論のロジックを理解しているだけでなく、南アフリカのそれぞれの出身地方に固有なジェンダーの規範と行為が、主流のジェンダーロジックとどのように葛藤するかについて何人か発言する。講義をするより対話している方がずっと面白い。教えることは何も無い。スポンサーである日本の制度側が、指導したいという欲望を捨てて、彼・女たちと対等に対話する関係に入って行けば、もっと自由になれるのに…と講義をしながら考え始める。きちんと灰色のスーツを着たこの研修プログラムの責任者らしい人が、教室の一番後ろに座って授業参観している。対話に参加せずその場に居ないかのように振る舞いながらもノートを取っているこの人は、どのような仕組みを底辺から支えているのだろうか?

この数週間後、また同じようなジェンダー研修をやるから講師をしてくれないかと頼まれた。南アフリカから来ていた「研修生」たちとの対話は、僕にとって刺激的だったから、引き受けることにした。担当の人に、どのようなジェンダー研究をしているかが判るようなものを送って欲しいと言われる。その後、担当の人から再び電話が掛かってきた。その人は、ばつの悪そうな言い方で、もう講師をしなくても良いと言った。僕のやっていることが彼らの計画に役に立たないことが判ったからだろう。この時、頭をかすめたのは、アフリカの人びとを指導したいという欲望と、そのような欲望を支える彼ら、そして彼らが忠誠をしめすジェンダー化した社会的身体のことだ。

四つのアナロジー

ポスト構造主義の影響を受けたフェミニストたちによるクリティカルなジェンダー研究と開発のジェンダー研究の間には対話が無い。「ジェンダー」が意味するそれぞれの問題群が両者にとって異なっている。前者は、ジェンダーを社会の制度と構造によって作られた性差に関する知識であると理解する、あるいはそのような知識としてのジェンダーが性差を作り出していると考える（Scott, Joan Wallach 1988. *Gender and the Politics of History*）。後者は、開発を進める上で新たに導入されねばならない、あるい配慮されなばならない、あるいは利用可能な性役割としてジェンダーを理解している。しかし、ジェンダーが作られるシステムには関心を示さない（Moser, Caroline 1993. *Gender Planning and Development*）。だからクリティカルなジェンダー研

究の立場に立てば、開発のジェンダー理解そのものが、特定のジェンダー関係の再生産に係わっていると考えられる。両者に共通するのは「ジェンダー」というインデックスだけだ。クリティカルなジェンダー研究は、ジェンダー関係におけるパワー（権力）の働きを問題にする。開発のジェンダーは、女性の「参加」とか「エンパワーメント」を規範的に取上げるが、権力の働きについては議論しない。そうすることは、隠蔽した秘密の種明かしになるからだ。このシステムでは、女性の参加とエンパワーメントを使って、女性を開発に動員することが目的になっている。言い換えると、ジェンダーの政治性を取り除いた上で、ジェンダーを利用しようとする。だから、ジェンダーの知識の政治に言及することは、集団でこの社会的身体を支えている人びとにとって「恥ずかしい」ことになるのだろう。これは市民としての恥ずかしさではない。親分の前で叱られる子分の恥ずかしさだと僕は思う。ジェンダーの政治性を問うことと、ジェンダーを囲い込んで規範を再生産することは、根本的に相容れない。



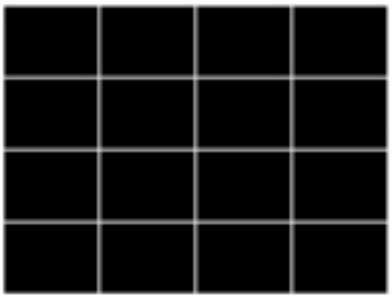
囲い込まれたジェンダー

今からおよそ五年ほど前、知合いのフェミニスト人類学者が、大学の職を捨て、恋人を追いかけてフィールドへ行った。しかし、その情熱は実らず、彼女はフィールドで恋人と別れた。大学に再就職することが困難だった彼女は、しばらくヨーロッパを転々とした後、友人の世話で世界銀行に就職した。彼女は、ジェンダー研究者として書くものと、世銀の職員として書くものを明確に区別している。一人の研究者の中においても、クリティカルなジェンダー研究と開発のジェンダーの対話は難しい。それだけではない。彼女は世銀で次々と出さねばならない報告書のプレッシャーにも追われている。だから何年かしたら再び大学に戻ろうと考えている。そのためにも彼女はアカデミックな研究と世銀用の報告書を区別しなくてはならない。

ロンドンで娼婦研究をしている別の友人による議論を思い出す。ロンドンの娼婦はエイズ感染の主要な媒介であると考えられているが、実はそうではない。彼女たちは、客とのセックスと恋人とのセックスを区別している。客とのセックスではコンドームを着け、恋人とのセックスではコンドームを着けない。コンドームを着けることによって客からプライベートな自己を守っている。彼女たちは、恋人とのプライベートなセックスでは、他者と自分の間に隔たりを設けない。だからコンドームは使わない。彼女は、反常識的な結論を出す。ロンドンの娼婦たち

は、恋人たちからエイズに感染するが、客にエイズを感染させることはない（Day, Sophie *et al* 1993. 'Prostitution and risk of HIV' *British Medical Journal* 307: 359-361）。ロンドンの娼婦たちは客の前で完全に裸にならない。あるいはプライベートな部分を客に触れさせない。彼女たちのプライベートな自己はコンドームによって守られているというのが、この研究の発見だ。研究の発表後、イギリス政府は娼婦を対象としたエイズ対策の予算を削減した。これは研究者たちの想像を超える反応だった。

話しを元に戻すと、世銀で働く友人がいつの日か大学に戻るために、一方で世銀で規範的な報告書を書きながらも、他方でクリティカルなジェンダー研究をする聖域を守っている様子に、恋人とのプライベートな世界をコンドームによって守っているロンドンの娼婦たちの姿が重なって見える。ロンドンの娼婦たちも売春を一時的な仕事と考え、いつかまともなビジネスを始める準備をしているのだから（Day, Sophie 1999. 'Hustling' in Sophie Day *et al* eds. *Lilies of the Field*.）。

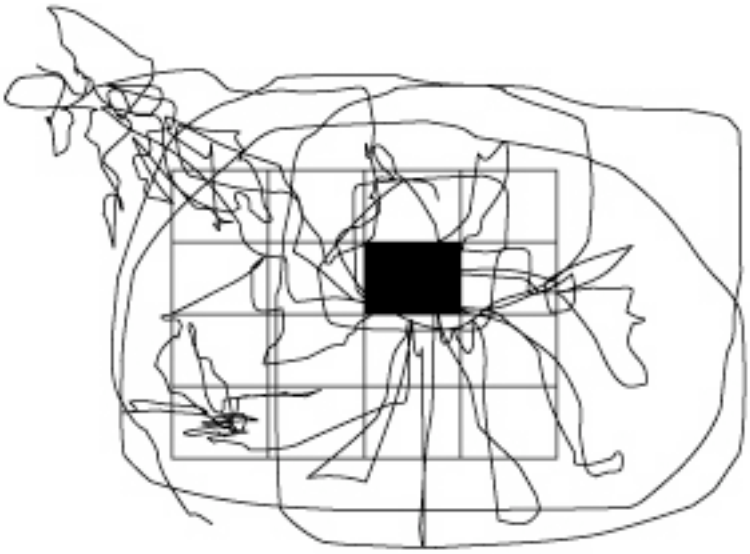


関係・過程としてのジェンダー

クリティカルなジェンダー研究をするフェミニストたちの間の対話も難しい。僕に影響を与えた二人のフェミニストたち、ヘンリエッタ・ムーアとドリン・コンドーの場合がそうだ。僕が人類学を学んだところは、構造機能主義の砦のようなところだったから、今振り返ると色褪せて見えるけれど、ムーアのポスト構造主義的フェミニズムとの出会いは新鮮だった。社会人類学が社会だけではなく、主体や情念に関心を持てることをムーアは教えてくれた（Moore, Henrietta 1994. *Passion for Difference*）。僕が人類学の博士課程に入ったばかりの頃、ムーアは講師になったばかりだったが、その五・六年後には数少ない教授の一人になっていた。彼女は業績だけで自動的に教授になった訳ではない。リーダーになった時も、教授になった時も、自分で推薦状を書き、人事の政治と戦っていた。ムーアがジェンダーについて語ること、書くこと、行動することが切り離すことが出来ないのを目の当たりにした。

コンドーとはカリフォルニアで何度か会っただけだが、ムーア以上に影響を受けた。それは第一に、コンドーの日本社会における自己形成についての批判的な関心であり（Kondo, Dorrine

1990 *Crafting Selves*）、第二に、アメリカのアジア系マイノリティーとしてのポストコロニアル意識である（Kondo, Dorrine 1997. *About Face*）。僕自身、海外（スリランカ、モザンビーク、エティオピア、イギリス、インド）で１０数年、ガイジンとして過ごした経験から、コンドーの日本社会における自己形成の過程を批判する視点には、共鳴できる部分が大きかった。しかし、アメリカ日系人のポストコロニアル・フェミニズムの視点には、学ぶべき所が多いと思う一方、コンドーと共有できないのも、このアメリカにおける特殊なポストコロニアルの経験だと思う。コンドーにムーアのことを二度話したことがある。コンドーはその度に返事をしなかった。マイノリティーであるアメリカの有色人種の女性によるポストコロニアル・フェミニズムのプロジェクトと、主流のアングロサクソン・フェミニズムのプロジェクトの間に横たわる溝の深さを知ったのはこの時のことだ。もう一つ深い溝がある。それはポストコロニアリズムが開示して見せる世界と、いわゆる第三世界の現実の間に存在する。ポストコロニアルのエリートたちは、欧米の一流大学で教え、欧米の大手出版社から著作を出版する。だから彼らは既存のシステムに依存しながら既存のシステムを批判する。第三世界のインテリが第一世界に出てきた時にポストコロニアリズムは始まるとアリフ・ダーリックは言う（Dirlik, Arif 1997. *The Postcolonial Aura*.）

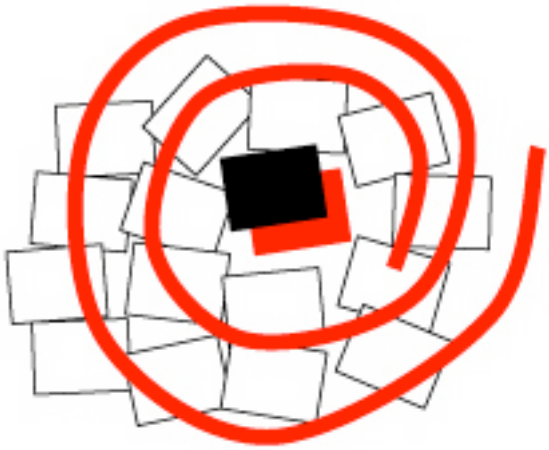


ジェンダーの外からジェンダーを見る

ジェンダーの研究方法には正典的なものが二つあることはすでに言った。「ジェンダースペシャリスト」が処方する狭く囲い込まれたジェンダーと、クリティカルなフェミニズムだ。「ジェンダースペシャリスト」に成るのためには、ジェンダースペシャリストを養成する修士コースを出て、ジェンダースペシャリストという名刺を作り、ジェンダーマニュアルに従って、西欧で主流の方法に習って、マネジメントのシステムの中でジェンダープラニングあるいはジェンダーアウェアネスの領土を広げることである。この囲い込まれたジェンダーのプロジェクト

（一つめの図）は、コントロールが弱まると究極的にはシステム内のジェンダー作用（二つめの図）を明らかにし、ジェンダーの公平という政治的目的を達成しようとするから、権力のバランスが変わることに反対する男たち（女を含む）による執拗な反対に遭う。関係・過程としてのジェンダーは、システムのあらゆる領域で作用しているから、ジェンダーに与えられた狭い領域の中だけでこれを理解することは、自動的にジェンダーをディシプリン・躾として囲い込む働きを担ってしまう。だから、ジェンダー作用の研究は、与えられたジェンダーの領域の外へ出て行き、他の領域、そしてシステムの外へ出て行かなければ不可能だ（三つめの図）。

堅固に見える近代合理主義のシステムの内と外に存在する非システム的な裂け目を巡るうちに、システムに隠蔽されていたセクシュアルな力を垣間見ることが出来るかもしれない。その力の動きを辿るとシステムが決して堅固なものではないことがわかる（四つめの図）。この視点に立つと、見るとポストコロニアリズムのジェンダーポリティックスが色褪せて見える。僕がこのテーマに係わるきっかけとなったのは、南インドの不可触民の女性たちとの出会いだった。彼女たちは、娼婦や、乞食や、女神だった。彼女たちとの出会いを通して学んだのは不可触民の女性を解放するための政治だけではない。そういうポリティックスには還元できないディシプリン・躾されていない世界の見方だった。この視点は、「市民社会」や「ヒューマニズム」から遠く離れたところにある（Uchiyamada, Yasushi 1999. 'Two Beautiful Untouchable Women' in Sophie Day *et al* eds. *Lilies of the Field*.）。



システムによって隠されたセクシュアルな力

ジェンダーを学ぶにあたってどれか一つの方法を選ぶことはない。ジェンダーのマニュアルを使いこなし、仕事上のコネとコツを上手に使って、器用なジェンダースペシャリストになっても構わない。しかし、そうすることが、レトリックとは別の次元、すなわちシステム全体との関わりの中でどのような生産性を持っているのかについては、自覚的でなければならない。関係性であり過程としてのジェンダーが、ジェンダーが囲い込まれた領域の内にも外にも存在することについて、どのような政治的な立場をとるかも問題になる。知的好奇心と方法論的冒険

心と学問的忍耐をもって、ジェンダー生成の徴を手がかりに、システムの内側と外側の探索を始めたら、感覚的衝撃や何かことばにならないもやもやに出会うだろう。その経験には何か重要なことが潜んでいるだろう。アナロジーを通して表象を試みたジェンダーの四つの見方（手段としてのジェンダー、ジェンダー・ポリティックス、方法論的冒険、構造に還元され得ないセクシュアルな力）を全て探求したらどうだろう。

去年一年間、僕は、ジェンダー研究の報告書の内容を発端にした問題の直中にいた。職場では、嫌がらせが続いていた。しかし、週一度、中央大学に講義に来ると、教室は殆ど毎回学生たちで満員だった。時には座る席が無く、立ったまま授業を受ける学生たちもいた。これはどれだけなぐさめになったことだろう。これを書いている間に、僕の新しい年の処遇が決まった。主任研究員の職を解かれ、単純作業に回されることになった。減給になり、在宅勤務の権利も失った。いつお前を首にしても解雇権の乱用にはならないとも言われた。市民社会が発達していない今の日本の政府系組織では、ジェンダーは、第一のアナロジーでしか語ることを許されていない。僕の授業にずっと付き合ってくれた学生たちは、「実社会」でどのような経験をするのだろうか。独創性を大切に、つぶされずに成長して欲しい。

二冊の本

最後に薦めたい本を二冊紹介する。ひとつは、David Henry Hwang による 1988 年のトニー賞受賞作品 *M. Butterfly* の脚本である Hwang, David Henry 1989. *M. Butterfly*, New York: A Plume Book。これは、歌劇『蝶々夫人』のポストコロニアル批判としてだけでなく、一世紀をかけて、ピエール・ロチの日記『お菊さん』からプッチーニの『蝶々夫人』さらには『ムッシュー・バタフライ』へと書き換えられて行ったのオリエントとオクシデントのセクシュアルな関係の神話的変容として読んでも面白い。英語は分かりやすいし、ちょうど百ページの長さしかない。

もう一つは、癌で急死した Alfred Gell の最後の本となった Gell, Alfred 1999. *The Art of Anthropology: Essays and Diagrams*. London: Athrone Press。この本はジェンダーそのものを扱ったものではないが、彼の正典にとらわれない独創的で自由な視点は、三つめのアナロジーで示したような世界の見方のヒントを与えてくれるだろう。ジェンダーはジェンダーのグリッドの外側から切り込んだ方が良い。彼は生前、二度教授に推薦されたが、二度とも断った。コメディーとしての人類学に力を注ぎたかったからだ。直感を裏切ってあっと言わせる世界観を提出して、みんなで笑うために。彼は死んでから教授になった。